



営農NEWS



ネギのべと病やさび病、黒斑病、葉枯病などの発生に注意しましょう

ネギの「べと病」や「黒斑病」、「葉枯病」は、被害残渣とともに、さび病は被害植物上で越冬し、降雨が続いて発病の好適条件になると発生してきます。このため、前年（前作）に多発生した圃場では、発生が多くなる傾向があります。

本県で、これら病害の発生が目立ってくるのは4～6月頃からで、べと病では葉に、少しぼやけた紡錘形で大型の黄白色病斑を形成し、その上に薄い灰白色のかびを生じます。その後、病斑はやや暗褐色～紫黒色に変色し、病斑部の周縁はやや明瞭となって、葉全体が汚く葉枯れをおこし、激しいと、株全体が枯死してしまうこともあります。また、さび病は、葉身に淡黄色～黄褐色の明瞭なやや膨らんだ病斑を形成します。

一方、黒斑病では葉に紡錘形の病斑を形成し、その上に淡黒色のすす状のカビを同心輪紋状に生じます。葉枯病も黒斑病と類似した紡錘形の病斑を形成しますが、カビはやや赤紫色をおびた暗褐色で、同心輪紋状となりません。その後、これらの病斑は長くひし形状に変色し、大きく枯れこみます。なお、べと病の病斑跡に、二次的に黒斑病や葉枯病の発生することがあります。また、葉枯病の被害病徴としてはもう一つ、中心葉などに退緑小斑点や黄緑色の不規則な斑紋（黄色斑紋症状）を生じることが判明し、春先や秋のやや低温期に降雨が多いと発生しやすい傾向があります。

これらの病害は、毎年必ず多発生するというわけではありませんが、ネギ畑では一般的に発生する病害で、梅雨前から梅雨期にかけてと、秋の長雨の時期を中心に、べと病やさび病では比較的低温の場合に、また、黒斑病では比較的高温の場合に、多発生しやすい傾向があります。

気象の1ヵ月予報（5月12日）によりますと、今後、天気は数日の周期で変わりると予想されています。

べと病は感染してから潜伏期間5～10日間あり、発病すると急速に広域で蔓延しますし、黒斑病や葉枯病、さび病も多発生してからでは薬剤防除の効果がなかなか上がりにくい病害ですので、発病の好適な気象条件が予想される場合には、薬剤の予防散布や発病初期の防除に努めてください。

<防除のポイント>

- 1) 圃場の排水を良好にし、多肥や肥切れを避けて適切な肥培管理に努めてください。
- 2) 夏ネギについては、特に収穫前日数に注意して薬剤を選択してください。
- 2) 薬剤防除は、発病前または発生初期に重点を置いて、薬液が付着しやすいよう展着剤を加用して行いましょう。
- 3) 薬剤耐性菌の出現を抑制するため、系統の異なる薬剤でローテーション散布を行いましょう。

表1 ネギべと病の主な防除薬剤（平成28年5月13日現在）

薬 剤 名	希釈倍率	使用時期 / 使用回数
ランマンフロアブル	2,000 倍	収穫 3 日前まで / 4 回以内
アリエッティ水和剤	800 倍	収穫 3 日前まで / 3 回以内
アミスター20 フロアブル	2,000 倍	収穫 3 日前まで / 4 回以内
レーバスフロアブル	2,000 倍	収穫 7 日前まで / 2 回以内
プロポーズ顆粒水和剤	1,000 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内
フォリオゴールド	800～1,000 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内
ペンコゼブ水和剤	600 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内
ダコニール 1000	1,000 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内

表2 ネギさび病、黒斑病、葉枯病の主な防除薬剤（平成28年5月13日現在）

さび病	黒斑病	葉枯病	薬 剤 名	希釈倍率	使用時期 / 使用回数
○	○	○	アフエットフロアブル	2,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内
○	○	○	アミスター20 フロアブル	2,000 倍	収穫 3 日前まで / 4 回以内
	○	○	ポリベリン水和剤	1,500 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内
○	○	○	ダコニール 1000	1,000 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内
○	○		ペンコゼブ水和剤	600 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内
○	○		オンリーワンフロアブル	1,000 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内
	○		オキシラン水和剤	600 倍	収穫 14 日前まで / 5 回以内
	○		ロブラール水和剤	1,000～1,500 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040